

講御堂寺過去帳による藍屋家の系譜的研究

松 木 明 知

一、はじめに

華岡青洲の生涯とその業に関しては、多くの先人による研究が積み重ねられている。大正十二年（一九二三）⁽¹⁾ 呉は青洲の生涯の業績を大冊に纏めたが、その大綱は現在においても色褪せておらず、われわれの研究上裨益する所が大である。その後出版された森慶三⁽²⁾らの編になる「医聖華岡青洲」、南圭三⁽³⁾らの「華岡青洲」も内容の過半を前記呉の記述に依存している。一方青洲の業績の中でも最大といわれる麻沸散開発の経緯に関しては前述の著書⁽²⁾⁽³⁾にも呉⁽¹⁾の記述以上の知見は披見されず、わずかに宗田⁽⁴⁾⁽⁵⁾が、呉の著書が復刻されたのを機に麻沸散について言及している。著者⁽⁶⁾⁽⁷⁾は青洲の麻沸散と同じ処方⁽⁸⁾の麻沸散を再現し、犬、ウサギ、人などを用いて動物実験を行ったが、医史学において実験的追試を行った嚆矢である。この実験によつて、麻沸散の効果は動物の種差によつて大きく異なり、結局青洲は人に対する至適投与量を決定するため、妻加恵などを対象とした人体実験を繰り返しなければならなかつた事情が強く示唆された。しかし右に述べた諸研究はいずれも、青洲の立場、治療を行った側から考究した研究であり、患者側から見た研究は皆無であつた。

このようなことを考慮して著者は、青洲によつて乳癌の手術療法を受けた最初の患者で、人々にも知られている藍屋

かんの系譜について研究し、その結果極めて興味ある知見を得たので報告する。

なおこの研究の要旨を平成六年名古屋市中で開催された第九十六回日本医史学会で発表する予定であったが、学会の期日が筆者が主宰する弘前大学医学部麻醉科学教室の開講三十周年記念行事と重なったため、紙上発表として載いたものである。

二、講御堂寺の引導靈簿に現れた藍屋家の人々

著者は奈良県五条市の講御堂寺の過去帳「引導靈簿」を平成六年（一九九四）十月と平成八年（一九九六）十月の二回にわたり実地に調査した。

同寺の過去帳「引導靈簿」は延宝元年（一六七三）から明治二十二年（一八八九）までの分が十二巻に分けられて保存されている。

巻一（延宝元年～宝永五年）、巻二（宝永六年～享保十一年）、巻三（享保十二年～宝暦元年）、巻六（天明九年～享和二年）、巻八（文政七年～天保十年）、巻九（天保十一年～安政六年）、巻十（安政七年～明治六年）、巻十一（明治七年～明治十三年）には藍屋またはアイヤ姓の氏名は全く披見されず、巻四（宝暦二年～明和五年）、巻五（明和六年～天保八年）と巻七（文化元年～文政六年）の三冊にのみ披見される。明治維新以降になると屋号などが廃止されて姓名で記されるようになるので、死亡者や喪主の中に「藍屋」姓を追究することは出来ない。左に「引導靈簿」から「藍屋」ないし「アイヤ」姓の氏名、法名、没年月日を抄出す。

巻四

○宝暦八年四月廿九日

惠正信女 アイヤ源兵衛 後家娘クマ

卷五

○明和八年正月廿二日

了春童子 アイヤ和助子

○安永六年九月三十日

本光信女 アイヤ佐兵衛妻

○安永七年三月十一日

自光童女 アイヤ佐兵衛子

○天明元年八月二日

了惠信女 アイヤ平吉子

○天明二年八月廿六日

心光童子 アイヤ佐平衛子

○天明三年十二月十八日

幻夢童女 アイヤ佐平衛

○天明四年三月廿九日

芳蓮信女 アイヤ佐平衛母

○天明五年九月三日

元夢童子 アイヤ平吉孫

卷七

○文化二年二月廿六日

春月智了信女 北之町藍屋利兵衛母

以上のように「引導靈簿」中には「アイヤ」または「藍屋」と記されているが、殆どは「アイヤ」であり、「藍屋」と漢字で記されているのは、文化二年に歿した青洲の患者「かん」のみである。

第一の問題点は家系である。一見して右の人々は二家系に分けられることが分かる。つまり第一は「アイヤ和助」の系統であり、第二は名前に源兵衛以下「……兵衛」のつく家系である。平成六年（一九九四）の調査時、このことについて森本孝順師にお尋ねしたが、師も筆者の意見と全く同じで、アイヤ和助の子は「了春童子」、アイヤ平吉の子は「了恵信女」と法名の第一字に「了」の字が用いられており、一方アイヤ源兵衛の系統については、「本光信女」「自光童女」「心光童子」など法名の第二字目に「光」の字が用いられていることから、まず間違いないであろうということであった。

第二に問題となるのは文化二年（一八〇五）二月二十六日に没した「春月智了信女」の条にのみ「北之町」という町名と「藍屋利兵衛母」と漢字で姓が記されていることであるが、これに対する解答は容易に見出し得ない。文化元年（一八〇四）以前はすべて「アイヤ」とカタカナで記されていることからすれば、文化年間頃になって住職が変わったためであろうと森本師は著者に語ったが、より詳しいことは師が逝去されたので、現在直ちにこの種々調査は出来ない。

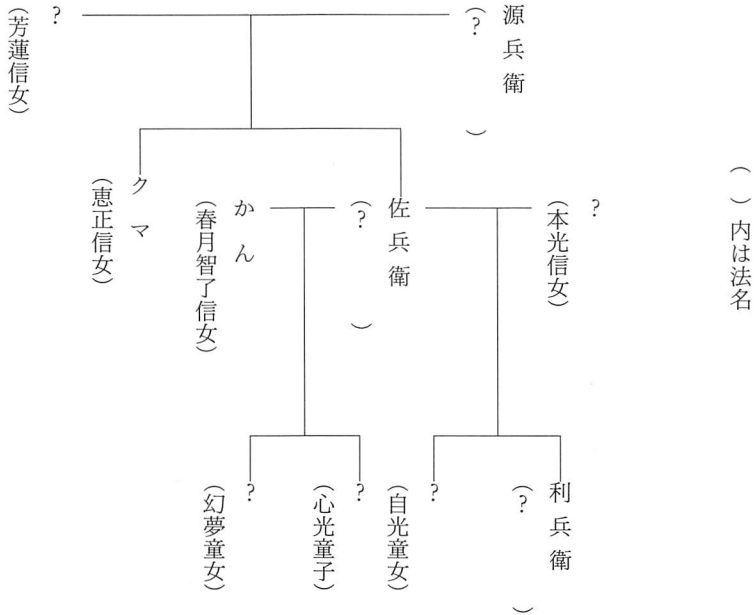
第三の問題は、藍屋利兵衛の代々についてである。「引導靈簿」の記載順から見て、源兵衛―佐兵衛―利兵衛と続くのが最も妥当であろうと森本師は言うが、不思議なことにこの三人の法名が「引導靈簿」の中に披見されないことである。例え他所で死亡しても、必ず菩提寺にそのことが伝えられ、法名が与えられるのであるから、右の蔭には何か特別の事情が存在するのもかも知れない。源兵衛はともかくとして、かんの息子「利兵衛」の名前だけでも披見されるのが普通で

ある。利兵衛の名がないということは、利兵衛を含む藍屋家の人たちが文化三年以降他所へ引越したことが最も考えられる。もつとも利兵衛の代で藍屋家が絶えた可能性も否定出来ない。そうであっても利兵衛の名前だけは披見されて然るべきである。源兵衛―佐兵衛―利兵衛の代々は墓碑も現存しないためこれを確認する術はないが、もし佐兵衛が利兵衛の父であるとすると、利兵衛の母かんは佐兵衛の妻ということになる。しかし「引導靈簿」には安永六年(一七七七)九月三十日に死亡した「本光信女」が「アイヤ佐兵衛妻」として記述されている。しかし「引導靈簿」には安永六年(一七七七)に当たることになる。しかし利兵衛の母は文化二年(一八〇五)二月二十六日に没した「かん」である。文化元年(一八〇四)にかんは数え年で六十歳であったから延享二年(一七四五)生まれのはずである。もしあくまでも佐兵衛の息子が利兵衛であったとすると、利兵衛の母「かん」は佐兵衛の後妻ということになる。つまり、安永六年(一七七七)に没した佐兵衛の妻「本光信女」の後に迎えられたことになる。そうとすれば安永七年(一七七八)に没した「自光童女」は「本光信女」の子であることは間違いないが、天明二年に没した「心光童子」と天明三年に没した「幻夢童女」は後妻つまり「かん」の子供であった可能性が高い。「引導靈簿」の記述からは以上記したような推察をすることが限界である。

第四は宝暦八年(一七五八)に没した「恵正信女」の続柄である。「源兵衛」の「後家娘クマ」とあるが解釈は二通りある。「後家娘」と続けて読めば、源兵衛の妻の娘であるが、後家となつて実家に戻っていた「クマ」と解釈が可能である。もう一つは源兵衛の後家の娘、つまり連れ子であるとも理解される。仮の系図では妻の娘と解釈して作つておいた。確実に言うことが出来るのは青洲が第一番目に乳癌の手術を行った藍屋かんは文化二年(一八〇五)二月二十六日に没していることだけであり、その他に関しては、更なる関係史料の出現が強く待たれる所である。とくに境内の奥には無縁の墓碑が数十墓現存しているが、改めて調査する必要がある。もつとも昭和六十二年(一九八七)に森本師は著者に対してその中に藍屋家の墓はないと明言していた。

なお青洲から乳癌の手術を受けた患者の中で五条駅出身の者が藍屋かんの他にもう一人いる。呉の著書に引用する所¹⁾

図一、引導靈簿から推定される藍屋家の系図



の「乳癌姓名録」の文化六年五月念四日の条に披見される「勝股元碩内」である。「引導靈簿」の巻七には勝股姓の法名が二名披見される。

○文化元年八月十八日

速到詳連信士 勝股元碩子

○文化九年六月十三日

貞正院夏雲情蓮大姉 勝股元碩妻

五条駅出身の勝股元碩の妻であるから、右の「貞正院夏雲情蓮大姉」は、文化六年（一八〇九）五月二四日に手術を受けたと考えられる「勝股元碩内」と同一人物と断定して差し支えないと思われる。そうとすれば、元碩の妻は手術して約三年後に死亡したことになる。

これは藍屋かんに次いで「乳癌姓名録」の中、死亡年月日が確定した第二例目である。

なお勝股（元碩）家の墓碑は五条市極楽寺境内の無縁墓碑塔の中にあるはずであるが、碑柱同志が密接に固定されているため、碑銘が読めないのも多く、勝股家

の墓碑は未だ所在が不明であることを付け加えておく。

文献

- (1) 呉秀三『華岡青洲先生及其外科』吐鳳堂、東京、一九二三（大正十二年）
- (2) 森慶三、市原硬、竹林弘編『医聖華岡青洲』医聖華岡青洲顕彰会、和歌山市、一九五四（昭和三十九年）
- (3) 南圭三『華岡青洲』和歌山県那賀町、一九七三（昭和四十七年）
- (4) 宗田一『華岡青洲の麻酔薬へ通仙散』をめぐる諸問題』二二三～三五頁、呉秀三著『華岡青洲先生及其外科』付録 思文閣、京都市、一九七一（昭和四十六年）
- (5) 宗田一『華岡青洲の麻酔薬開発―外来技術受容の日本化―』未中哲夫編『実学史研究IV』二七～四六頁、思文閣、京都市、一九八七（昭和六十二年）
- (6) 松木明知『近代麻酔科学を創った華岡青洲―痛みとの闘いの歩み―』『日経メディカル』二五―六号、一二〇～一二三頁、一九九三（平成五年）
- (7) 松木明知「大麻とケシの文化史―麻沸散の謎―」『日経メディカル』三四五号、三八～四〇頁、一九九六（平成八年）
- (8) 松木明知「藍屋佐兵衛の妻と勝股元碩の妻―青洲の乳癌患者について―」『日本医史学雑誌』四一卷二号、二二二～二二三頁、一九九五（平成七年）
- (9) 五条市 極楽寺墓地墓石調査台帳、勝股元碩の妻の墓石の番号は八四〇（欄外番号一六六九）である。

（弘前大学医学部麻酔科）

A Genealogical Study of the Aiyas from the Burial Records of Komido Temple

422

by Akitomo MATSUKI

The name of Kan Aiya has been widely known among Japanese medical historians, as she was the first to have her left breast removed because of cancer under general anesthesia by a surgeon Seishu Hanaoka on Oct 13th, 1804. Numerous papers are available concerning the surgeon Seishu Hanaoka and his colleagues, however, little is known about his patient Kan Aiya and her family.

The author visited Komido Temple of Gojo City twice to detect the names of her family from the temple burial records which consist of twelve volumes and in which the earliest description of death dates back to 1673.

A total of ten people with the name Aiya were discovered in the records and they could be divided into two families according to their posthumous names ; Gembei Aiya's family and Wasuke Aiya's family. Kan Aiya belonged to the former.

It is strange to us that no exact names and dates of deaths of Kan's father, her husband and her son Rihei were detected in the records, but I tried to make a tentative family tree of Kan Aiya's family. As there are no gravestones of the family in the temple, any new documents or historical materials about her family are necessary for further detailed study.

(10)